

外国人個人自由旅行者の実態報告

—釜ヶ崎の簡易宿所でのアンケートと聞き取り調査から—

The Actual Situation of Foreign Free Individual Tourists in Kamagasaki, Osaka

松村 嘉久*・濱中 勝司**

MATSUMURA Yoshihisa & HAMANAKA Katsushi

大阪市西成区の釜ヶ崎の簡易宿所街では、外国人個人自由旅行者の宿泊が急増しつつあるが、その実態は把握されておらず、さらなる誘致に向けた有効な施策も見出せない状況にある。本研究では、大阪国際ゲストハウス地域創出委員会(OIG)の協力のもと、2006年秋に実施した外国人宿泊客へのアンケート調査、OIG加盟簡宿のスタッフへの聞き取り調査から、釜ヶ崎で急増しつつある外国人旅行者の実態に迫る。

キーワード:大阪釜ヶ崎(Kamagasaki, Osaka)、外国人個人自由旅行者(Foreign Free Individual Tourists)、簡易宿所(Affordable Guesthouses)、大阪国際ゲストハウス地域創出委員会(OIG)

1. はじめに

個人自由旅行者のなかで、バックパックを背負い低予算で長旅を志向する者がバックパッカーと呼ばれる。途上国ではインバウンド観光が本格化する以前に、バックパッカーの集う安宿街が形成されることが多い(横山, 2007)。猥雑で多様な空間編成の安宿街が洗練されてゆくに伴い、一般的な個人自由旅行者や国内の若者たちも魅惑する地域へと変貌する場合もある(森, 2007)。低開発地域のローカルなコミュニティや経済を底上げする手段として、バックパッカーによる観光の可能性は積極的に評価される傾向にあり(Hampton, M.P. 1998; Scheyvens, R. 2002)、今後はコミュニティ・ツーリズムと絡めた議論も期待される。

グローバル化が進み、アジア新興国に外資が集まり経済成長を遂げるにつれ、主要な都市では新たな建造環境が生産され再編されてきた。その過程で先進国から途上国へ向かうバックパッカーの存在は周辺化され、その生存空間も狭まり、個人自由旅行者との境界も曖昧になった。一方、バブル経済が崩壊した日本も含め、欧米先進国の経済成長は長期にわたり低迷が続いた。このような世界情勢のもと、かつての途上国から先進国や他の途上国へ向かう観光流動が成長し、アジア新興国の成功者は先進国に向い、若者たちもバックパックを担ぎ他の途上国へと向い出した。石森(1997)の予言したアジア発の「観光ビッグバン」が今まさに胎動している。

先進国でも途上国でも、苛烈な自由競争のもと、地域間の経済格差や個人間の所得格差が拡大している。今では途上国の先進地域の繁栄が、先進国の衰退地域や発展地域を凌駕することは珍しくない。途上国の成功者は年々その層を厚くし、その生活水準は先進国の貧困層よりも遥かに高くなった。このような状況のなか、個人自由旅行者の動向を考えるならば、途上国や先進国という国家の枠組みでの思考や分析は、発地側でも着地側でも、もはや意味がない。超高級志向から低予算志向まで、個人自由旅行者は国家の枠組みを超えて多層的かつ多極的に存在する。重要なのは、その各層・各極の旅のスタイルや予算に適した生存空間が、着地側に存在するの否かであろう。

円高と物価高に悩まされたかつての日本に、欧米のバックパッカーやアジアの若者たちの生存空間は無く、訪日観光に魅力を感じても断念せざるを得なかった。松崎ら(2005)は東京を事例に外客誘致と絡めて、低廉宿泊施設を1泊8,000円以下と設定して分析を行ったが、低予算志向の旅行者の感覚からすれば、設定上限が高すぎる感が否めない。途上国先進地域の安宿の相場から、1泊3,000円以下の宿泊施設があれば、彼らの生存空間は日本にも広がり、桁違いのマーケットが手に入る。本研究では、低廉な簡易宿所(以下、簡宿)が集積する大阪市西成区の釜ヶ崎の変容を紹介した上で、そこに宿泊する外国人旅行者の実態にアンケートと聞き取り調査から迫りたい。

2. 変容する釜ヶ崎の簡宿街

(1) 釜ヶ崎の概観

大阪市西成区の通称・釜ヶ崎は、JR大阪環状線新今宮駅の南側に広がる東西600m南北800mほどの狭い地域である。行政上はあいりん地域と呼ばれ、日雇労働者が集う日本最大の寄せ場であった。90年代半ば頃から、バブル経済崩壊後の建設不況、日雇労働者の高齢化などの影響で、野宿生活者とホームレスが急増していった。一方、携帯電話の普及と不安定雇用の地理的拡散で寄せ場機能が低下したため、若い日雇労働者が釜ヶ崎に流入する機会も減少した。

最盛期200軒を超えた簡宿は、地域をめぐる社会情勢の変化に伴い、約50軒が廃業に追い込まれ、60軒余りが生活保護受給者向けの居住施設へと転業した。2008年10月現在、大阪府簡易宿所生活衛生同業組合に加盟する簡宿は90軒ほどにまで減少した。

(2) OIGの結成と外国人旅行者の受け入れ

釜ヶ崎の地域資源は、何よりも簡宿であり、そこで寝起きする男性単身労働者が日々の生活を楽しむ空間編成そのものである。既存の地域資源を利用して地域の活性化を図るため、同組合内に2005年春、大阪国際ゲストハウス地域創出委員会（以下、OIG）が設立された。13軒の簡宿で結成されたOIGは、宿泊施設として簡宿が存続できる新たな道を探るべく、外国人旅行者の積極的受け入れを表明する。同時に、地元商店街や大学とも連携し、地域全体の再生を重視して、国際ゲストハウス地域を創出するとの決意を示した。

結成当初のOIG加盟簡宿13軒のうち11軒は、堺筋東側の太子地区の立地条件の良い地下鉄動物園前駅周辺に位置した（図-1参照）。外国人旅行者の受け入れを先駆的に始め、結成当初からOIGの活動をけん引するホテル中央グループ（以下、中央G）の簡宿5軒も、御堂筋線動物園前駅近くに立地する。2007年に新加盟した4軒のうち2軒は萩之茶屋地区にある。なお、OIG結成前の状況やOIGの活動の詳細については、拙稿を参照いただきたい（松村、2007）。

中央Gの外国人宿泊数の推移を示した表-1からは、驚異的な成長が確認できる。5軒の客室総数は580室で、最近の外国人宿泊率は総じて2、3割であるが、特に外国人宿泊客が多い夏場のホテル中央や来山南館では5割を超える日も多い。国籍別の宿泊数では、2006年から欧米系の宿泊が増え半分近くを占める（表-2参照）。低予算志向の外国人は、HOSTELWORLD.COM

をよく利用するが、2004年末にここに登録して以来、特に欧米からの宿泊者が増えたという。

OIG加盟簡宿17軒のなかで、外国人旅行者の誘致に最も成功しているのが中央Gである事実は疑いないが、残りの12軒の簡宿にも、常におおよそ数名から十



図-1 釜ヶ崎におけるOIG加盟簡宿の分布(2008年)

注) 原図として「ゼンリン電子住宅地図デジタル版大阪府大阪市24区」を使用した。

表-1 ホテル中央グループ5軒の外国人宿泊数の推移

月	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
1	882	1,055	2,463	3,200	4,000
2	948	1,449	2,302	3,094	3,757
3	703	1,000	2,463	2,837	3,147
4	567	1,517	2,614	3,871	4,141
5	522	1,530	2,324	3,106	3,723
6	553	1,397	2,465	3,217	3,617
7	1,092	2,763	4,170	3,729	5,856
8	1,506	3,229	3,969	5,608	5,807
9	569	2,421	2,451	3,238	3,617
10	464	1,847	2,766	3,058	na
11	464	1,663	2,613	3,401	na
12	1,023	2,415	3,191	3,984	na
総計	9,293	22,286	33,791	42,343	37,665

注) ホテル中央、中央新館、来山北館、来山南館、ビジネスホテルみかどの宿泊数の合計。統計資料はホテル中央グループより提供いただいた。単位は泊。

表-2 ホテル中央グループ5軒の国籍別外国人宿泊数

年	韓国(%)	中国・香港・台湾(%)	欧米(%)	その他(%)	総計
2005	4,538(20.4%)	6,546(29.4%)	7,351(33.0%)	1,185(5.3%)	22,286
2006	8,629(25.5%)	7,017(20.8%)	15,380(45.5%)	2,765(8.2%)	33,791

注) 統計資料はホテル中央グループから提供いただいた。欧米にはヨーロッパ・アメリカ・カナダに加え、オーストラリア・ニュージーランドも含まれた。

数名の外国人が宿泊している。OIG に加盟していないが、1980年代から外国人旅行者を受け入れてきた実績のある老舗もあり、OIG 未加盟の簡宿に泊まる外国人も増えつつある。釜ヶ崎簡宿街全体での外国人宿泊数は、少なく見積もっても最近では年間 5 万人を軽く超え、年々増加傾向にあることは疑いない。

しかしながら、外国人宿泊客に関する資料は、中央 G に提供いただいた宿泊統計が全てであり、その実態は不明な点が多い。そこで我々は OIG の協力のもと、中央 G の宿泊客にアンケートと聞き取り調査を実施し、その結果を踏まえて、OIG 加盟簡宿のスタッフからも聞き取り調査を行い、その実態に迫った。

3. 外国人個人自由旅行者の実態

(1) アンケート・聞き取り調査の方法

アンケート調査の内容は中央 G や OIG のスタッフも交えて検討を行い、現場感覚を踏まえて設問を絞り込み、英語・中国語（繁体字）の 2 種類を用意した。アンケートは 2006 年 9 月中旬から 10 月下旬にかけて、基本的に中央 G 5 軒のフロントで外国人宿泊客に配布し回収する方法で 206 件の有効回答を得た。このうちの 40 余件は対面対話方式で聞き取りも行った。

(2) アンケート回答者の属性

旅の形態に関して、206 名中 200 名がパッケージツアーでない個人旅行と回答した。旅の同伴者に関する設問では、101 名が「友人」、17 名が「家族」と回答し、無回答が 61 名もあり、27 名が自由記述欄にわざわざ「ひとり」の類を記入した。訪日目的では、172 名（83.5%）が観光・レジャー、9 名が親戚友人訪問、7 名が留学、2 名がワーキングホリデーと答え、ビジネス目的はわずか 6 名であった。以上の結果から、アンケート回答者は、「友人」などと行動をともにするものの、少なくともパッケージ化されていない個人自由旅行者と捉えてよからう。

アンケート回答者の職業は学生が最多で 57 名、これに教師 22 名が続き、その他の回答例は多岐にわたるが、総じてホワイトカラーが多い。アンケート回答者の地域別分布を表-3 で見ると、表-2 の国籍別宿泊数統計と比較して、アジアの回答者が著しく少ない。その理由として、第一に、アンケート実施時期が特に韓国・香港・台湾からの宿泊客が減少する 9 月以降であったこと、第二に、韓国語のアンケート用紙を用意しなかったことが挙げられる。韓国人の回答は残念ながら 12 件

しか得られなかった。アンケート回答者の性別を見ると、全体の男女比はおおよそ 3 : 2 であるが、アジア地域では女性比率が高く男性比率を上回っている。年齢は全体として 20 代以下の若者が 7 割と圧倒的に多く、アジア地域でやや年齢層が高い（表-4 参照）。

(3) アンケート回答者の実態

大阪は上海・釜山と国際航路で結ばれているが、船で入国は 18 名、船で出国予定は 22 名であった。回答者のなかで、国籍と現住地が一致しない者が 36 名（17.5%）いて、16 名は日本、9 名は韓国に住む。日本在住の 13 名、韓国在住の 8 名は、英語教師か留学生である。韓国在住の 5 名は船で出入国している。韓国から訪日する欧米人のなかには、韓国で英語教師をするためのビザの更新を目的とする者もいる。

表-3 地域別に見たアンケート回答者の性別

地域	実数	比率	男	%	女	%	na
アジア	54	26.2	18	33.3	32	59.3	4
オセアニア	22	10.7	16	72.7	4	18.2	2
北米	37	18.0	22	59.5	15	40.5	0
ヨーロッパ	81	39.3	54	66.7	25	30.9	2
その他	12	5.8	8	66.7	4	33.3	0
総計	206	100.0	118	57.3	80	38.8	8

表-4 地域別に見たアンケート回答者の年齢

地域	小計	-20代	%	30代	%	40代-	%
アジア	54	33	61.1	21	38.9	0	0.0
オセアニア	22	16	72.7	4	18.2	2	9.1
北米	37	30	81.1	4	10.8	3	8.1
ヨーロッパ	81	58	71.6	15	18.5	8	9.9
その他	12	8	66.7	4	33.3	0	0.0
総計	206	145	70.4	48	23.3	13	6.3

表-5 地域別に見たアンケート回答者の訪日回数

地域	小計	初回	%	2回	%	3回以上	%
アジア	54	17	31.5	10	18.5	23	42.6
オセアニア	22	13	59.1	6	27.3	3	13.6
北米	37	28	75.7	2	5.4	6	16.2
ヨーロッパ	81	63	77.8	9	11.1	9	11.1
その他	12	10	83.3	1	8.3	1	8.3
総計	206	131	63.6	28	13.6	42	20.4

表-6 地域別に見たアンケート回答者の訪問国数

地域	小計	日本のみの訪問	%	日本以外も訪問	%
アジア	54	48	88.9	5	9.3
オセアニア	22	10	45.5	12	54.5
北米	37	25	67.6	12	32.4
ヨーロッパ	81	50	61.7	30	37.0
その他	12	9	75.0	3	25.0
総計	206	142	68.9	62	30.1

訪日回数を見ると、地理的に近いアジアとオセアニアでリピーター率が高く、北米とヨーロッパで初めての訪日者が多い(表-5 参照)。周遊型旅行者の実態を捉えるため、日本のみの訪問かどうかを尋ねたが、アジアでは日本のみの訪問が多かったものの、全体の約3割(62名)が日本以外も訪問すると回答した(表-6 参照)。5ヶ国以上訪問する予定の猛者が26名いるが、全てアジア以外の旅行者である。5ヶ国以下の場合、訪日に前後して、韓国、中国、台湾、東南アジア諸国を訪問するケースが多い。

日本での滞在予定日数は、アジアで比較的短いものの、地理的に遠い北米やヨーロッパなどは、日本在住者が含まれていることを差し引いても、一般的な訪日パッケージツアーでは考えられないほど長い(表-7 参照)。大阪での滞在予定日数も、4日以上と回答した者が114名と過半を超えた。大阪での滞在日数が思いのほか長い要因は、立地条件が良く価格も安い釜ヶ崎の簡宿を起点に、関西圏の観光地を日帰り周遊する旅行者が多いからである。京都・奈良・神戸などの近場だけでなく、世界遺産のある姫路・和歌山・広島などに日帰り遠征する者も少なくない(表-8 参照)。新幹線も含めて乗り放題のJR Japan Rail Passを購入した旅行者は、特に安宿を起点に列車での旅を楽しむ傾向が強い。一方、大阪での訪問地は、ガイドブックで紹介されている一般的な所に人気が集まった。

4. おわりにかえて

本研究からは、釜ヶ崎簡宿街に従来の訪日観光客とはかなり異質な旅人が集う実態の一端が明らかになった。雪が降るなか半袖短パン姿でバンコクから到着した欧米のカップル、合気道の世界大会で来日し大会終了後に大阪の名門道場に通り出したイギリス人、ジャニーズ系のコンサートを追っかけ毎年年末に台湾から来る女性のグループ、中古書店で漫画を大量に買って持ち帰る東南アジアの若者、簡宿スタッフへの聞き取り調査では魅力的な旅人の話が続出した。

先進国大都市で交通が至便な地域に、1泊3,000円以下で泊まれる宿泊施設が集積する。欧米のバックパッカーやアジアの若者は、そこに日本での生存空間を見出し根付き始めている。世界中の低予算志向層をターゲットに組み込めれば、訪日観光客市場が飛躍的に拡大することは間違いない。低予算志向の旅人は確かにお金を節約するが、決して貧乏ではなく、旅が長期

におよぶため意外と金持ちであり、納得のいく活動や買い物での出費は惜しまない。日本が本気で観光立国を目指すのならば、釜ヶ崎簡宿街は得難い戦力であり、その重要性和可能性は高く評価されるべきであろう。

表-7 アンケート回答者の日本滞在予定日数

地域	小計	10日以下	%	20日以下	%	21日以上	%
アジア	54	36	66.7	7	13.0	4	7.4
オセアニア	22	5	22.7	12	54.5	5	22.7
北米	37	13	35.1	7	18.9	15	40.5
ヨーロッパ	81	7	8.6	30	37.0	38	46.9
その他	12	1	8.3	4	33.3	5	41.7
総計	206	62	30.1	60	29.1	67	32.5

表-8 アンケート回答者の観光行動

大阪から日帰り観光する地域		大阪で訪問する観光地	
行き先	実数	訪問先	実数
京都	123	大阪城	131
奈良	82	難波・道頓堀	118
神戸	70	梅田	92
姫路	50	海遊館	65
和歌山	13	USJ	30
広島	10	通天閣	23
名古屋	3	WTC/ATC	12

付記：本研究のアンケート調査では、中央Gや滝井彩ほか阪南大学の学生の協力を得た。聞き取り調査では、中央Gの山田英範氏と増田力氏、西口宗宏氏ほかOIG加盟の簡宿経営者の方々にお世話になった。記して感謝いたします。

【参考文献】

- 1) 石森秀三(1997):アジアにおける観光ビッグバン, 月刊観光, 367, pp.6-7.
- 2) 松崎裕介・十代田朗・津々見崇(2005):外客誘致からみた東京の低廉宿泊施設に関する研究, 観光研究, 16-2, pp.1-8.
- 3) 松村嘉久(2007):日雇と野宿のまち・釜ヶ崎を国際観光で再生する, 地域開発, 515, pp.30-36.
- 4) 森聖太(2007):東南アジアのバックパッカー・エリアに関する研究, 神戸大学大学院総合人間研究科・博士論文, p.122.
- 5) 横山智(2007):途上国農村におけるバックパッカー・エンクレープの形成—ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例として—, 地理学評論, 80-11, pp.591-613.
- 6) Hampton, M.P. (1998): Backpacker Tourism and Economic Development, Annals of Tourism Research, 25-3, pp.639-660.
- 7) Scheyvens, R. (2002): Backpacker Tourism and Third World Development, Annals of Tourism Research, 29-1, pp.144-164.